

第1回 人間座 「田畑 実戯曲賞」

選考コメント

○選考過程概要

6月26日、第一回田畑実戯曲賞の選考会が人間座スタジオで開かれた。

選考委員は人間座の菱井喜美子、劇作家田辺剛、演出家山口浩章の三名。応募作品は全部で34作品、当日までにそれぞれが応募作品を読んで集まった。

まず、選考方法について、話し合わせ、選考委員がそれぞれ、これだと思う作品を挙げた。

菱井さんは長尾譲二さんの『原因と結果とフライパンのラブソディー』と森山智仁氏の『Girls, be a mother』、土井誠善氏の『愛してる』を挙げ、田辺さんは柳生二千翔氏の『ひたむきな星屑』と合田団地氏の『深い緑がねじれる』を、私は柳生二千翔氏の『ひたむきな星屑』と、向坂達也氏の『難破船ケリーの正義の話をしよう』を挙げた。

各作品に対する詳細な講評は選考委員それぞれの講評を参照していただければと思うが、大まかに言うと、菱井さんは、人間座での上演を視野に「オーソドックスさ」や「わかりやすさ」、「完成度」などを理由に上記作品を挙げ、田辺さんと私は「現代性」や「オリジナリティ」を上記作品を選んだ理由に挙げた。

昼食を挟んで話し合った結果、『ひたむきな星屑』、『深い緑がねじれる』『難破船ケリーの正義の話をしよう』の三作品が最終候補作品に選ばれ、さらにその後話し合った結果、第一回田畑実戯曲賞受賞作品は柳生二千翔氏の『ひたむきな星屑』に決定した。

○ 講評 田辺剛

水野はつねさんの『傘の尖り』が忘れられない。いまの生活にほとんど絶望している高2の少女をしてくらげとセックスさせるのはなぜなのか。同級生の男の子ではない。高度に進化し知性を持っているとはいえ相手はくらげだ。それを自傷願望と性欲の悪趣味な象徴だと揶揄するのは簡単だろう。しかし毒針のようなくらげの生殖器に貫かれないと語る少女の、自身の存在感を取り戻そうとする切実さと果たして実現するセックスの詩による描写は、抑圧された一人の少女を世間から同情を誘うだけのコトに落とすまいとする作家の覚悟の反映だ。苦しむ少女に注目するフリをしながら彼女らを可憐なスケープゴートにしてしまう現代社会への批評である。ただそうした強い印象の一方で会話の運びや物語の構成などの拙さから残念ながら受賞作には今回推さなかった。水野さんの次作に接する機会があればと率直に思う。

合田団地さんの『深い緑がねじれる』では登場人物たちが自らではなく他人を刺していく。ただしこの劇世界では刺しても殺せないし刺されても死なない。誰もが生来持つ暴力は実行されるのではなく妄想として他者と共有される、そのようにして社会を循環しているという見立てがここにはある。自らの存在の不確かさに迷う人らが街を徘徊する。何人かは深い緑に囲まれる山や寒い海にたどり着くがそこも人々を抱擁する大自然ではなく、妄想の渦中にあるいびつな彼岸だ。自分を充

たすため、あるいは抱えているものを捨てるために人々は赴く。それにしても、その場所で身投げすることがこの世界から逃れる唯一の手段であるとすれば、それが実際の死を得る代償として実現することであるならなんと皮肉なことだろうか。つねに陰が差す劇世界だ。しかしそれだけにたとえねじれていても山の緑は深くみずみずしい。乾ききった台詞で成り立つ世界との対比が鮮やかだった。美しかった。

柳生二千翔さんの『ひたむきな星屑』ではその小さな街も夏には深い緑に包まれるが物語は冬に向かう時期である。街は高速道路に貫かれている。車の赤いテールランプが行き交うそばに登場人物たちはいる。パーキングエリアのフードコートだ。この作品も『傘の尖り』や『深い緑がねじれる』と通底しているけれど、特にわたしが注目したのは物語の構成がむしろ台詞のやりとりの外でなされていることだ。街を貫くだけの高速道路と舞台になるそのパーキングエリア。緑や赤そして白という色彩。不意に来るメールや返信を待たないメール、届いていないかもしれない手紙。一つ一つは小さなかけらだがそれらを巧みに配置することで物語を構成させれば、登場人物と彼らが生きる場所の孤独が豊かに想起させられる。そして洗練された一人語りのことばもある。例えばある場面はトイレの中で男という加絵という女が一人語りをする。その台詞のあいまに短いト書きが記される。「触れている」。そして語りが続いた後で現れるもう一行。「加絵の指先だけ男に触れている」。文字数としては台詞の方が圧倒的に多いのだがこの場面を成り立たせているのは彼女の指先だ。このように口から発せられるものだけがことばではないことを柳生さんは作品のあちこちで示している。いくつかの瑕疵を差し引いても十分注目に値する作品だ。

わたしは選考の席で受賞作の候補としては『深い緑がねじれる』と『ひたむきな星屑』を挙げた。

上に挙げた三作品は作家自らが作り出した物語を語りつつそれと対峙して思考を重ねた軌跡だ。演劇は物語と無縁ではありえないが、かといって物語を伝えるだけのツールであってはならない。そのことを再確認させてもらえたのは幸いだった。

○ 講評 山口浩章

今回、第一回田畑実戯曲賞を創設した人間座の菱井さんから、選考委員の依頼をいただいた。戯曲賞創設意図を菱井さんに伺ったところ、一つは、戦後京都の演劇に大きな役割を果たした田畑実氏の名前を残したいということ、もう一つは、これから演劇を担っていく人たちに何か役に立つことをしたいということで、劇作家ではない私でも何かのお役に立てればと、選考委員を勤めさせていただくことにした。

応募作品は多岐にわたり、音楽劇から新劇風な作品、ファンタジーなど様々だったが、読んでいて、面白いと思った作品は、柳生二千翔氏の『ひたむきな星屑』と向坂達也氏の『難破船ケリーの正義の話をしよう』だった。

柳生二千翔氏の『ひたむきな星屑』は、群馬県の田舎町、その町には高速道路が通っており、今や町一番の賑やかな場所となっているサービスエリアが舞台である。町には高速道路の入り口も出

口もなく、人々は通過していただけという状況は、私の生まれ育った埼玉県大里郡岡部町（現在は深谷市）によく似ている。その閉塞感は通過する人々が要る分余計に強まる。脚本はモノログや、風景描写が多く、風景そのものが登場人物たちの心をよく表している。

物語の中に出てくる“櫻井翔”からのいわゆる迷惑メールは、外界との唯一といってよい接点であり、外界から救いを求めるメッセージでもある。つまり、外の世界にも救いはないという可能性を示すが、そうした閉塞感を持つ者同士の繋がりそのものが救いとなる。このあたり、実際の上演ではどのような手法を取るのか、楽しみでもある。

また、身体感覚の描写に独特な部分が見られ、他の作品にはない視点と感覚に興味を惹かれた。

向坂達也氏の『難破船ケリーの正義の話しよう』は不思議な読後感のある作品。登場人物はまともに話も通じないようなバカのケリーとその息子が主で、息子が聞いた父親の話を語るという体で進み、時折話の筋をぶった切るような、または読んでいる現実の世界と舞台上の世界を強制的に結び付けるような話が挿入される。

ちなみに、応募作品を菱井さんから渡された際、いくつかの作品はあらすじや、作品のコンセプトが書かれた一枚目が抜け落ちており、この作品もそのうちの一つで、最初は題名も作者も分からないまま読んだ。

読むうちにバカのケリー独特の生き方に魅力を感じはじめ、ラストでは、ケリーが亡くなったことを淋しく思うようにさえなっていた。

ケリーもその息子も、周囲の世界や社会とうまく付き合えない。人生の様々な場面が描かれるが、周囲が思うであろう事の重大さは本人には認識されない。本人にとって重大なことは、周囲からはどうでもよいことに見える。そうした社会との決定的な齟齬を、しかもさして認識しないまま楽しそうに生きている。そういう愛すべきバカを、独特の文体で描いている。

以上の事から、私はこの二つの作品を推し、最終的には選考委員三人の同意を得た柳生二千翔氏の『ひたむきな星屑』が受賞作品となった。上記作品以外にも魅力的な部分のある作品がいくつかあり、今後の作品に期待したい。

このような多くの作品に触れる機会を下さった、田畑実戯曲賞と菱井さんにそして、応募してくださった作家の皆さんに、改めて御礼申し上げます。